乙丑塘報録

廿一

慶應元年乙丑正月ヨリ十月迄

和書門

類	號	函	架	冊
	三一四二四	二二三	一四	二一

内閣文庫

和書 類	號	冊	函	架
	三一四二四	二一	一五一	四

内閣文庫

番號	和 31424
冊數	21 (6)
函號	151 15

国立公文書館 National Archives of Japan

宅江敢来呼之節者

和尚

丹羽掃部殿

丹羽掃部殿

毛利大膳大夫殿御領分御代官山口或者御旗本

御先手衆　御持筒組大膳大夫殿御屋敷梅河勝光

江戸屋敷留守居殿々役人衆長谷

天徳寺等御新造様御尊兄

依之御道具差上候ニ付町奉行衆江御届仕候
兼而之御届ニハ及不申候

柳生式部少輔へ

同文言

田沼志摩守へ

同文言
御側御用御取次

稲葉讃岐守へ

同文言
以上

田沼能登守へ

同文言
御側御用御取次

松平丹波守へ

同文言
以上

松平伊賀守へ

同文言
御側衆御用御取次

牧野河内守へ

以手紙啓上　内藤若狭守、

以手紙

啓上　稲垣信濃守、

以手紙啓上

二月十日　拙者同道

先達而御願申上候趣無御延引御差支無之候左候ハゝ三位表

以登城之節御代替右御用番御老中御届書差出候

以手紙[illegible]御願書差上候以来之御沙汰被仰付

被為成候御沙汰之通之

二月廿七日　松平右近将監
　　　　　　彦坂紀伊守

就夫御願之通被遊御聞届候、為御祝儀被下置候、猶御指揮可

被成候處、御願之通被仰付候、右ニ付御礼之儀ハ来ル七日、

此度為御礼御登城被成候而御差支無之候、

三月十日　右御同道

二月廿七日

乙丑正月十日

[illegible]

一　金剛大服寺江御伺之事
　　然所人数出張警衛之事
一　三條以下之人江申渡之事
一　大服寺家来共心得方之義御下知相待候
　　右様之事共江御達之事
一　役表向御下知可有之所出張人数勤
　　諸[illegible]警衛可申事
　　不用[illegible]可申事　右之紙
　　〔別紙〕大服寺〔之〕儀ハ〔右之〕〔通〕〔可〕〔申〕〔渡〕〔旨〕
　　〔御〕〔下〕〔知〕〔之〕〔事〕〔例〕〔之〕〔通〕
　　[illegible]
　　右之趣人数出張可有之事

　　　丑　〔月〕

　右之紙
　　慶應寅六月御渡書
金剛大服寺并六條寺社御觸之事

之熟覧其趣尤出来候 情可思召候之
足下改年来春御縁組之儀承知被成候
戸川弾正殿宅者近来以之甚申上度
御事ニ付御内意何分御程能御取計可被成
前顕之趣御聞届御評儀之上御取計被成
万端御取扱之程奉願候 以上 御評儀之上御差図
速ニ御請可被成候 御来年評儀御勘弁可被下候
恐惶謹言 御内々沙汰之儀被仰付候
拙者御下知被仰付候御沙汰次第可申上

猶期後信可申述候

正月

右一通

御状ニ依清長兵衛へ差出 就之大
様子詳根元外語方ニ而其可為
奴家ニ為我ニ候段御承知可被下

正月

某殿

駒井甲斐守写

御手洗警衛之部

毛利大膳征罰ニ付寄手之者共右場所途中
警衛し御手洗浦迄大目付人数并家来共
右警衛指揮之儀被仰付候ニ付大目付
可致旨被仰出候事

一 松平安芸守人数出張之儀
右者十月二十一日安芸守ゟ被申出候人数
差遣し長州表へ征討之節討手
御手洗表へ差出候

右者御手洗表へ人数差出候様
警衛之儀可申付候事

一 松平安芸守家来人数出張之儀
右者安芸守ゟ差出候人数并家来共
御手洗表へ可差出候様
相達候事

一 松平安芸守家来共御手洗表へ差出
人数差出候様御手洗表へ大目付
警衛之儀可申付候事

二の切

一 尾張前大納言殿ハ 陳出ス
郡又ニ 仰付られ 大久保加賀守山口殿
河内守ハ 仰付られ 於御本陣ニ罷出 大小袋持
出張り 御召ニ付 御先供仕り 毛利稲葉両殿
大輔永井主水正 戸川肥前守 宮本弥
多摩之ハ 御詰之 御伴の 渡辺ニ付 御上
致在 渡辺 延太夫 跡道よ 後見にて
御先 江戸表 所番之 御供被 大膳大夫

御警衛 人数 右ハ 家老 人数持警衛
方々兼 指揮として 大目付 駒井甲斐守 御先
輸御再 御手番人数 御旗本 嬬立 右
右人之 指揮ニ随ひ 殊どうとも 御手打
大膳大夫 人 御陣之 御用 御渡 御船 弐拾
前二 又之條 以来 右於 松平 御預 被仰付
御下向 来年 右 仰付 一年

別紙

毛利大膳大夫父子并右條以来是迄御預奉言

可有之 御用向有之候間登城可被致候

以 何月之事

今般三家宮内始メ人々先頃江戸表ニ参候
向後御取締之儀ハ東家ニテ厳重ニ取締候
子光誠ニ取ハ之様ニ細川越中守 松平能登守
有馬中務大輔 松平修理大夫 右之面々ハ
平岡丹波守

細川越中守 有馬中務大輔 松平修理大夫 松平
阿波守

右同文之一通差出

一橋殿 江

殿下ニは弥御清穆

奉恐悦候 御先代様御始メ御機嫌克被為入恐悦至極ニ奉存候
職ニ罷在候得共今般御請可仕哉之義ニ付
御内意之趣ニ付而ハ御間柄之義ニも御座候へハ
兼而申上候通ニ付何卒宜敷御取計
被下度

三月十日

慶喜

殿下　　　　近江守申

一此度壱岐守速ニ入朝之内表聊之大宮門
以御所并中納言細可被申上候間早々御沙汰以後
能々ト存候

　二月十七日　　飛鳥井中納言

　　　　　　　　野宮中納言

一橋中納言殿

会津少将殿

桑名少将殿

防長之儀先般使之趣委細可申上候此段
以外表向速ニ公義ニ継候旨申上候
以上

　二月十七日　　松平伯耆守

野宮中納言殿

飛鳥井中納言殿

　乙丑二月十七日閣老より御達

大樹公上洛之儀毎々　御沙汰之趣早々進達ニ相成候由

年々御家御富貴[illegible]御[illegible]奉存候

萬々静謐之[illegible]山海之瑞[illegible]禎祥[illegible]

可被成[illegible]此年[illegible]御座候[illegible]

可相成[illegible]和[illegible]奉存候[illegible]

貴様方[illegible]早速[illegible]和[illegible]

之節[illegible]以之外[illegible]

大樹公上洛之儀[illegible]候[illegible]

御通行[illegible]道中[illegible]世[illegible]

帰国[illegible]境[illegible]貴様[illegible]

殊更[illegible]出府[illegible]

大[illegible]勢[illegible]到来[illegible]

四方[illegible]存[illegible]勢[illegible]勤[illegible]

御出府[illegible]勤[illegible]

[illegible]年[illegible]大樹公[illegible]

[illegible]聞[illegible]許[illegible]

何卒[illegible]早速[illegible]逢[illegible]

貴様[illegible]年[illegible]楽[illegible]

[illegible]

之　御出来申

右様公上洛武家之[illegible]年　此年以来無之

候也[illegible]延引　上洛者可然[illegible]文[illegible]

候也[illegible]年[illegible]有之[illegible]敷[illegible]子孫之[illegible]

之[illegible]武家[illegible]無之　旨関白殿ヘ　御申

之候

亀谷子藏曰
有此一段全篇
発色

書藏本皇朝史略後　甲子

往年余與松本士權相交於江户臨別士權贈余以此書且囑作其生傳余諾焉而未果壬戌以後士權夙夜盡瘁奔走王事以一布衣先天下倡義雖事不成而靖獻先生死有餘烈噫今而後此書始重於九鼎大呂矣遥持故人之贈也士權平居好讀國史此書多不離手書中每有大江廣元姓名輙墨筆抹殺蓋鄙其佐覇也可知

其勤王有素非出於一時之奮激若余也從事文墨半生白面於世無毫裨益有愧於士權者不尠而其生傳之囑反為死傳悲夫甲子仲秋

松本奎堂傳

松本衡字士權称謙三郎奎堂其號參州刈谷人也參河為德川氏創業之地人之奉德川氏殊甚而士權獨尊崇　王室恥口称德川氏盖其天性然也士權少時學槍傷其右目乃始從事乎讀書時藩侯頗勉於政事有意用士權士權方少年鋭意自任不復顧慮有老臣專事者士權痛面責之老臣自慙引去而群言沸騰攻士權者如蝟毛士權由是獲罪屛居者三年益發憤讀書遊江戶才名傾動一時與余及仙臺岡天爵等交最善去漫遊京畿會黨錮之獄起還而下帷於尾張教授生徒若將若焉者歳在壬戌余與天爵相遇於浪

華胞書告士權士權決然來會乃芸貨屋
而居詩酒追逐相樂也當是之時朝廷數
下攘夷之 詔而德川氏不奉逆跡頗露
島津三郎率勤王兵入京師畿内義徒聞
風響應人皆謂天下事旬日之間可定矣
而三郎百方持重不發義徒憤懣欲別奉
一親王挙兵議既决有與士權有四若來
告士權問曰奉親王於何地曰叡山士權
曰叡山地淺易得易失不若大和十津川
之險僕往年久遊其地與其土豪相識其
土豪皆樸實而好義有元弘之遺風請先
往說焉即夜馳赴大和而事中変義徒或
死或散士權亦為淡嶌之行矣其明年癸
亥德川將軍入朝諸侯多會焉 詔督攘
夷之事甚急士權適在京師踴躍拊髀曰
此吾時也日夜周旋其間至廢寢食者數
既而奸人離間中外搢紳之賢者相踵去
位 朝廷正議掃地三郎亦觀望兩端

士權於是知事不可為乃擁中山公忠光入吉野山挙義將軍使五六諸侯攻之士權等本一介書生倉卒起事糧餉弗繼器械不給其砲丸至或以木為之初士權之從軍也患其左目至是遂盲鷲家口之戦軍敗士權輿在後軍慨然太息曰吾事已矣與其就擒寧自裁遂剖腹而死死時年三十四士權軀幹短小音吐清亮善鼓須磨琴風流自喜而其中隠然有不可犯者所作詩文逸宕多奇氣著稿若干巻散佚不可考又工草書有黄蘗僧獨立之風

野史氏曰士權嘗登駿之久能山到東照公廟前戟手罵曰爾若猶吾他日得志則必発爾墓鞭爾骨見者莫不驚以為狂可謂奇男子矣有伊東三弥者士權郷人也往年訪余於京師逆旅余以尋常人遇之聞其與士權同事而死蓋亦士權薫陶之所及而悔余之當時大不知人也

又曰以勁健之筆写奇俊之士感慨悲憤使人気短

亀谷子臧曰士權雖死矣賴有此一傳足以不朽乎千載也

本間至誠傳

士之所以為士者顧志如何耳他不足論也其志卓然足以取信于人而不幸蒙罪名以死如吾友本間至誠者君子悲之至誠名純称精一郎不詳其籍里自言越後人狀貌偉好帶長刀人皆以為劍客也嘗同遊艮齋先生之門不屑攻章句深痛王室陵隳慨然有勤王之志及賴三樹等獄起至誠亦以嫌疑繫京獄者半歲既得免而其志益堅辛酉冬余在浪華見至誠於逆旅至誠慷慨激昂罵幕府不絶口市尹聞之使人伺察其動靜至誠勢不能安遁走讚岐余作書介諸日柳世章世章博徒之好義者也去數月矣中夜忽有敲戶來者余時病在蓐驚起見之則至誠也余且喜且怪具問其故曰吾自讚岐歷土

田中子家曰語簡意深至誠之声音顔色宛然如見

佐西游肥薩欲徧訪同志之士會薩侯生父三郎率兵東上是以先来耳因挙手示余曰事不出十日矣三郎之入京師也声威震動海内既而其所為頗不滿人意有欲先挙事者至誠等應之衆夜廻江至伏見而事遒不成至誠等散去久之有人殺至誠於京師榜其罪案取其首梟之或曰為薩人所殺蓋非其罪也癸亥春余以事赴京師訪藤本鐵石談及至誠事曰至誠

又曰湊合有帰宿毫無遺憾

嘗至搢紳中山公第大声罵曰方今醜虜陸梁幕府不奉朝命 皇上軫念寢不安席食不甘味而諸搢紳柔懦軟弱惟貨財酒色之嗜長袖者豈直一文銭哉第中相顧失色言雖近狂可以見其志矣而松本奎堂亦曰世章聞至誠之死設位祭之云鐵石名真金備前人賣画為活深沈有大節後與奎堂同事而死

田中子家曰篇中挿入奎堂鐵石世

章而二子同事而死世章博徒之好義者
也二子之所道世章之所為自是至誠大
節之確證亦可以見立言之不苟

大坂來書

一長州一条先達　御上洛之節上書并
勅答書写御渡ニ相成候ニ付去ル廿六日長州留守居へ相達候処
為之義も相致候而当家ニも無之候ニ付此節ハ非常之事ニ候へハ弥出兵
ニ相成候へハ奇兵隊之者因州之方へ参り之処ニ而在京之候御処置
解候へ共なか〳〵承引不致既ニ藝州ゟ相成候ニ付隠
忍ひ可借候へ共出張之上大坂ゟ附添相登り候様
相成候而も罷出候事ニ御座候故大ニ付出張雜
仕候よし元来ニ藝州家老も此請ニ被出於大坂ニて

弥出張致し可申旨御沙汰之事ニ付急度追々
上ニ外国船兵庫港へ来候とも厳禁商船ニて御覧
為ニ横浜へ参り候而船数も相増し軍艦ハ勿論
又ハ夫々横須賀港内ニ碇泊し外国船横浜ニ繋
ニ趣江戸表ニ於ても不宜候
皇都ヘ程近き場所ニ付猶更此上様に心得違
無之様可取計候出勤可有　御在坂中ニ付而者
東体有之ニ於而者都之者共英吉利西仏蘭西并ニ
船ニ而白川辺まて早速兵庫ニて異船へ乗込

一　右之内御所様御談判之儀相成候儀ニ而
八ケ条之内追々御談判相済候由都之風説ニ候
兵庫開港之儀者ニケ条ニ而御談判相済候由
佛蘭西へ出候先年江戸表ニおゐてペルリニ而不労
不埒無之者ニ而当時世界中交易せ一体之時候
ニ於ては薩長ニ於ても御国之商館有之交易致
候中異人共ニ於て彼是申立候而一統
皇都ニ於而彼是仰付候ニ付居出張候而
此時ニ於而御沙汰之事も有之都之風説

いたし閣老方ニ而も此事端ニハ異論も有之然ル処
一橋様ニハ御下坂之上直様引返し上京之上
叡慮ニも此事ニ付ては何れも条理御開き之
様子ニ付　将軍之御引取も被為在候様
御殊近頃様ニハ未た何れ御勝手之為方ニおゐて
従来之御心ニ而ハ兼而御申立之筋之通長州之
御処置之儀ハ御手数ニ相成候間右様ニ相成候而ハ国難之年
此度之義ニ付ては四方之様様之風説も有之此度相
成候ハヽ諸市中立退候事交易相成候得ハ下方

此節御為筋ニ而も何之交易未然之風説も有之
又京都表ニ而も此度容易ならさる儀ニ而御説之有之
様ニ而も御都合次第方ニ而此方之都合向も早く御座
ニ而も御差支之向も有之候趣ニ付御都合次第ニ而又
人気ニ相立候様ニ而御勝手之義ニ而雑説も有之
難き義ニ而御都合之義ニ付此度之儀ニ付長
下方御都合次第ニ而其御説ニ而此節社寺
兵端を相開候ニ付ては御手続之通切迫之事ニ付
皇国之人心を此節ニ而も甚以ひしと様ニ而未来様ニ

頻りニ議論も有之趣実は長防ゟ承置候向も
此雑説専ら発し一統ニて何れにも未来之天下之動揺
相発不申様と実意唯々神祈仕斗ニ候

十月二日朝

別紙

公儀　公方様京御滞在ニ付取締方之義
此事柄都て不速探索仕候処姫路様抔承り居申候
急飾出発何れも各人之義ニ候其外　公儀ニ供
方ニ而も内輪儀と相違之趣承り候得共様子伺ニ

参出ニ而も儀ニ付何方ニ而根元ニも承り
右様雑説ニ而専ら取沙汰ニ而取締ニ相成候様
相成ニ而此趣承候由此方ゟ出候ニ而種々様々
御座候　将軍様京都御方迄御発途ニ成候
右之次第ニ而此雑説之義ニ而此事柄と存候得共
京都之者町飾も有之候様此者達之姿ニ候
諸方探索致し候　御祥儀一橋様ニ而御鎮
此段ニ譲と存候
御所ニ而出立御趣意候段続之処　且御之儀

此間法主伏見ニ御備留ニ被遊候ら　御出有之、紙
此間進出年ニ入ニ付、初而致候上ハ甚奉伺候
於前様ニモ厳重ニ趣参殿官位君上ニ茂参殿ニ於て
恐悦ニ候
御所から御出し被遊　筆文并紙為下し候而容易
古書何方不読ニ絶し候此頃筆物有之不足ニ
先ツ風流ニ而ニ茂此書画并墨形ニ於て安満
此処ニ於而終
御庭ニ而ハ許容も無之候一概ニ不申相模守様小笠

兼様我等迄ハ同意致ニ一概様以下候而引返候し
京様ニ趣意ニ而何遣去而ハ筆物有之し難風流
此方文墨形ニ而茂　薩長土阿ニ而茂藩家臣居候様ニ
ハ風流之所ニ而扨而如何ニ而者此筆物都而雅ニ御動
恐入候斗　何乍　伏見ニ而　御備留之様様ニ而此頃筆
も可有之筈ニ此上ニ而様様承り中上度候得共彼是
いつれも而御遊ニ相成味ニ付先々如此ニ御座候敬白
上度余ハ追而可申上候也

十月三日

方今内外之事多々之折柄

宸襟を不被安候ニ付萬機之御職掌ニ於て

尤痛心之餘り此際猶舉閑ニ而猶更一橋中納

言殿永く　京都ニ在て事務之儀此度被遣候

中納言殿ニ此段被仰付候旨被遊候

御所ニ此趣被為在此段申達候ニ付

此段申達候

十月二日

右於御老中列座周防守申達

今般

還御ニ被遊候ニ付　御上京京都ニ御座候

還御之儀此御沙汰ニ付伏見江御備

可被行

被遊候ニ付御書付之通被仰付候

十月六日

十月朔日

阿部豊後守

松平伊豆守

厳重之趣去年ニ至当住法印より左右寺訴状
以御法度停止候
御所より仰出候ハ得共今以東都ニ及越状
並寺社奉行等之致代役宅ニ而不届ニ付差圖
申渡

十月寺社より仰渡町觸

今般高輪辺より　仰出之趣ハ是迄非常時寺社
此借橋ニ而高地　此農漁先伏見ニ而客大
御内意東海道　高輪ニ而道筋より仰出之門

其迄ニ遂之の

十二月

寺之通用橋ニ而段以来仰渡者此限ニ而遂了

久留米

一藩中是迄人物とて無之第一猶役抔と談合
し候處幕命不足深く年々て如妾婦柔弱之節
制のみ俗吏共聚財を事とし下情を背にせ
先年牧泉之党二十人斗り脱走所々より圍繞
姑息にしておゐて不振当十月にも亦三人又脱走致留
残る藩士之儀ハ牧泉抔ハ如き者之流之者と申居
此ニ至り候て可知

新発

四方封候之小藩不少候て様人改所之評修業
二ケ年前より無事にて入手形無之居又出口之藩不
在候て列之両側寄せ入手形抔無之候ても
通不申候処往来人之出合之節入手形
往来切手取扱同居之者入手形抔無之候て
入口番所迄追返し入手形抔無之候上なくては通り
兼候又隣国之者ハ俗名にて別に三軒右之如く
少く生国往来及入手形抔同様上往来之ものに
其上なくては一名も六ケ敷一刀之者を持ちて此為

依テ今不義ニ兵刃ヲ以テ士を鏖し城下市中ニ於ハ

止宿ノ諸藩士ニ迄も一列ニ敵ト為すへし

大村

其後始メ一藩挙て攘夷論ニ唯々文武ニ勉

切磋法度之由聞ニ大村城下ハ長崎と

唇歯ノ地形ナレハ兼而常々ニ一致シ交易ハ家中ニ運送

不論自由ナルヲ他国ヨリ通行ノ牛馬ヲ禁シ夷人ノ

売買を見合ハ領内ニテハ一切之を不許とす

又藩士渡辺昇曰く藤井藩ハ十ケ藩人なりして

隊を長崎へ差向けるなと云ハ伐長ノ事起りし入

中ニ人数操練ヲ申セ中陽会ニ参り御延長崎を

平素当藩ニ則藤井藩ノ患ニテ是亦令波

兵ノ又年号の末ニ幕府命して伐長之事を示ス

何時ナリトモ人数繰出シ相成ル様手当ヲ渡辺田衛

りしとの事

新柳

四境之役所揃ハ一切戦ヲ辞シ既ニ応援ヲして

藩士四十名ヲ他ノ藩人大村ノ藩士と中用ヲ為す

此節之様子承り彼四人ニ問ニ何ノ集ニ而今度者
田銭中乃乱ニ付右四人之者一万人参り一名西洋ニ渡り
上ニ而勝手方ニ政府の事ゝ手数相勝ニ付上なりくハ
二萬ちニ用事有之にて尤也西會ハ六ヶ村ハ又大村領
ニ而長崎三四里北浦ニ有長井村ノ津関有て
浪人之全く長崎諸侯其跡より此村ニ立集る故
旅人双方ニ着ゝ必往生切手持ニハ不及只船
持参書付ニ而もしく往くゝ事也

長崎

崎ハ別段ニ中ニ筆紙ニハ尽ニ而一通彼地役
人侯ハ除く人なれとも役主之地獄ニ混を称ス
其如くいかにも可分有る然見廻候ニ大略役
所ノ中ニ第一諸奉行役所人及市中之者ニ至迄
三ヶ所人之除閑戦不當者ハ其後去り更吏人を
取扱ニ只夫又の如くして御国之者を縛る胡密い
不及ゝ有振り次出一ヶ事ニ関係候る事取更織
日ごく不張ニ絶候して元誰も人拒者其後ハ座主
ぐ渡ニ之月吏人ニ而上奉り市中之郷細帳ニ御十兕出之

諸穀之又候異人ニても購集を取扱申候由
壱ト上重子ハ候異人亦蓄ニ致し諸穀ミき、十四文
銀元ヘ一滴も不残とも申ス又四百小砲ニて商人
支人あ穀し買ても異人より借合貸あり年ヨ買入候
諸人とし商人ニ其より手向ひ致しゆへ不得止本穀
し拵と申候趣買入も弍倍手て取扱申さる
右穀ニ其中ニ於ても一の追坂平價目ニ高騰
於て市中穀米不種詰落も先々餓死致しか商土より部
唯候ヘ米買ニ来りし由の追々魚骨西亜から唐館

借用致度候を申上候得共許容ニ不相成由
唐館ニ別て丸山ニ茂不出とも申ス支那人共
難儀致し様ニ食物剃を以て事を済し候方今
然候異人ヨリ兵又の如く之取扱ひ候支那人
少ニも不立進て丸山ニ引移り候由の英国商とし
ガバルト申者名ヲ家来ニ致し為申候趣彼船田
而從者ニ候事と誠ニ難も異人ニ為ニ年ヨリ蒸居猶
以猶して偏便の事致し候て酒飯ニおよ兵又誠に
月々謡歌舞踊相致し中ニもの形色も甚しく候

主ハ是ヲ妻妾ニ見セテ中庭ニ出シ遊バセ玉ヘ
トハ是誠ニ是モ如斯況ヤ其他ノ者ニ於テ公家
ニ有也トヤ云ヘリ其ノ松尾氏ノ後ニ其遺ノ魯西亜
軍艦渡船到来陸ニ上テ當港碇泊付毎ニ
十五日ノ年四月辰中交由申ナキ不是之モ見許家ニ
於テ候ヲ松等六人ノ見而來テ人ニ國ヲ出サレ其ノ
リヲ右悪キ事ニ於テ當年一條ニ至ラヌ後ヲ
於テ是ヲ無ト為ス許ニ出ス事ニ年ハ是迄ハ
遣ヒ来ル筋ヲ相新ニテ上天年ヲ以テ不絶

當所ニ於テ刺殺サレ彼等ハ胸中ニ入ト思ヘバ実ニ
然ル新ニ於テ隠ル程ノ此等ノ年今迄渡海ヲ不得ト或曰
松尾ノ言ウ処理ニ叶ヘリト雖モ年ヲ久シク来年モ
不見ノ論ナリ登ル丑ノ年異船到来渡海スル今ノ
迄ニ追部人家命ヲ名残万人又當時ニ不安モ
相便ク直ニ掃萬民目ニ燒蝗ヲ以テ将ニ餘死ノ人ト
成ル者モ當ニ是等彼等ト共ニ亡ビ行ク可キ
其ノ死亡スル者ヲ至リ其彼不為ニ何レサヘ以ナシ萬民
其死亡ヲ不顧其人ヲ如見又田ヲ所ノ後更ニ年十五日

信ヵ多何ゆゑかゝる事の當月廿日夷館へ行し
風説ありかゝる不埒者を召捕べし一人夷館へ参り
出る所浪人共集り大浦海岸にて召捕べしと申合
いかにも召捕べしと諸人夷人なれば浪人とて支那人
諸人の者は何国の何と申者にて参り候哉と申に支那
申者参り浪人とも申候て元来は清国の者
にて支那人也當時眼を開き種々の事申者なり夷人曰
然れば夷国は将軍家なり将軍のゆゑをもって
被召て存知るゝ様にもかなはず家にて手本に相渡候

親ども共に参る幕府へ年々四月渡し支那の申出る
により當月薩摩村の魚商人夷人へ支那人
を魚刀にて刺殺し候ども其大方を約りて捕へ申せし
子取り從人数十人にて向ひ手入を圖に里正より申
付け右之人々給料の儀を申立して裏にかゝる
脱走いたし候儀は海岸にて取り候役人ども
夫に付役人にて手を探索は由夷人ども何か
近くに於て取調べ候より四月頃より申付候
田口某人の儀を魚四百四十貫文にて出す

爾て云ふ日本十三浮益にハ来舶する所ハ泯濱
通行云ふ有西画一枚に附ハ此等書ありて其国一年に浮する所を
汁下ケ六万文銀ありて六文易仕者の他邦より
貨是中加之家之尻換り仕其上他邦之泯濱
通商を引下ケ家屯因極め交易済て又て
所詳家決りる可然又阿蘭陀也海去方
今ニ不知て一通高し所直益ハ花旗都る国あり
境実所是毒之形一生掃除支傳決定
此故其戦争を及ひし上又々和親交易す

与於極ら可然下り掛之捕しうる其中也田

大埔

凡夷館八十軒皆七八間より十四五間にて五色文飾
国風にて此建物之形ハ一種ありて居庫抔を
多く切石赤瓦抔を積立たる堅固なるもの也
山際に天主堂有り横二間長十間餘り其所前ハ
二方塗ハ円十字之形を以て屋上に表せし門上に楷書
にて天主堂と記し中に耶蘇磔之像を安置す
其像之右十座是ハ耶蘇之弟子なりと云 或人曰

天主堂ノ題字ハ額ニ書テ不作之書なり夷人
ニ書ス時ハ蝌描ニ文字ニて然とも此書ニて題額ニ記
ルゝ事也トモ云十五日當寺ハ市人此利ヲ言フ者甚
多ク共ニ此ノ院ヲ拝ミ謁シ諸見附 十字塔ヲ用ヒ不造
拝せし八者ハ多く如しと寺院者也るを見附ケ
法真ニ至ル拒絶サヽ田然モ今猶門ニ彼宗ヲ
戒メ者如きの暴道院とは蘭醫接
悔ノ稱ニ病院ヲ設ケ病院ニ新ニ建立シ諸
生殺人ヲ集メ病人を療治致し多く相集ル

ナル由ニ暴道院此殺道ヲ立テ也病院総ヲ
夷館ロ揃ハニ病人ヲ拝セシメ床上ニ臥シ一或ハ曲
隅ニ倚リ口ニ唱ヘテ夷人ト異ナル所ニ出居ル
ノ或人ニ語ヲ此ハ夷人互ニ相賀スルヤ如何ヲ
やふんと薩摩ノ藩人面ノ辞ヲ以テ更ニ答セス
爲集正リ兄日ク兵庫開港ヲ許シ家ニ健
者忍ヒ貴徹ハ殺シ左かく右かくし申さること有りよ
薩人モ左ヲ驚キ然レハ其像図ト右ヤ左ヤト問ケレハ
八夷人云ニ其像ト申ハ將軍家印及関白朱印於ト

亞米利一艘此より宮古へ通達せんと時ニ当港を出帆
ありと着するよし十月廿日の事なり

天草

日田郡代窪田治部右衛門殿へ去ル此節にて乾組西国ニ
申来り官府カとし当時俗吏四五人まて雅治兵に任し置
の武人の信先にて英国がバルトヤ高取従者二三十人斗り
川辺ー田猟に来り候ものを治遣し云ふニ砲発
致候に付官吏が和解に来る中には此者は将軍へ
候地にても余得目極ゟ在家へ候ものへ御酒肴
へるよし候又ハ一切せぬニ此者ハ幕府へ属し居るよし
不存と答候由ハ俗吏共只恐れ止傍観致居候
耳私等ハ公料ニ生し他之手ニ支配を権
威ヲ好ミ私領主を羨候今ハ却而公料の陰影
にて夫故に而ニ睥睨せし色切歯に不堪く大卑賤し
取ちれハ争もすべし此道りは如何なりゆき候
やらんとなき候へ共其の西国港にて此度廿定
場ニ揺曽致し候ハ有高所在て国家ゟ申来て窪田
丟評判有之然に官吏共ハ其色陽理居候ニ付急く

聚財治る所百姓の困窮をも不顧督責促促
治る田の地方農民疲立て倦付たる人心惑乱
治し由其頃は天草郡は人気暴騒して軽剣抜
守て能逆に死を招きて猶も出風にて是又
郡代ヲ御停治之天草郡は表向三万石の地に
称する所も其内実八十五万石も抑りし由三島今
八ヶ村の中大庄屋と申者十軒ありて其大庄屋
本より毎ヶ二人紀合る二十人宿府より出指揮由
の様人百姓は不苦郡代庄代厳しく支配しける

厳重にて猶も旅人は船場より来る人は浜村々にて通
りし田畠荷物は出制ありて萬事半ば倦りける
郷兵共は若党ともなり山谷へ立て又島中農兵を羅
庄屋を命じけるに不承して其掛を命し或は一村
一島令は不通又百姓は年貢等も以て扱ふと定
庄屋掛は年貢を附る賄賂をさせ同十四年前とし
太く人も年西多数殺されて事の始

島原

斯其頃一乱の濫觴を逐ふ所以当七ヶ村封内

藩と云ハ滝弾之助（故佐藤里見次郎）と申者多く有志士に
彼是両使被為も方ハ田然に足ハ全く能藩思
要ニ付恢復之策を四藩へ被説を嘉克松坂某方
滝弾之助之某に挿五郷格と使節と志願何となく諸人と
右之類惟時之本にも治其に于撫しお満に能
藩へも甲斐これ四藩大隅論を受け於て
去ル事且松坂嘗て云慕府命なるニハ　天子と雖も云
列ても不苦捨と暴論抔申けるも右ハ田畏有く
右ハ年後く及沙汰田付八月十五日辰ノ下刻也

○島原ニ而滝弾之助ハ後藩へ申条ハ有滝弾之助ハ
瓦ニ揺る於て捕せんと欲しけれとも右ハ田口松坂ニ拝斗
去て其士之者を罪し窃ニ退くと欲し然旅士も
些も不解而終に四藩之大隅扮ニあわれける或日大
右ハ宮へ参り法問ニ及ひ又も右ハ当惑ニ急ニ速返
答も出来る田村大竹直之一刀先ニ切附る伊東
弾之助去總首を切つて切川島田中村端平の四人
皆々とも立去り政府ニ訴出中事之顛末を申候當実ニ
大和民士と評判甚田然雲千壹三十人計り有し

一也四人ゟ相さしよせしも落しと申ず右廿二十人余り
然る所存にて只今の通り六ケ国罷り斬首に
寺院甘輔とおなじく様も三十余名出勝手鋼也と吉田
○異書し御丸山太郎井上章平孝三郎人切丞
不都合も有之太郎より十月下旬江戸浪宅に参り留と
あなた章平孝三郎に逢て京は近く参る由にて一此浪
浪宅は之れ人又浪宅も敷梅郎とおなじるなれは
早速敷村とおより敷村塩見も出町寺院甘輔
とおなじ吉田満章平孝浪に罷り一橋公御家来の

市に達梅田源次郎至りとて人河原村書をも加へ
田めり年々出会ひ来り承知致候て一言足りとも章
たる寺院甘輔とすおなじ公卿に至りも君に承知なれは不穏
をなして大に其を歎かめしく乱益大切なる事に急
当時と正気至梅田源次郎に言を用る者なし一人も無し
前に此の外田と正気を構客し当時は梅田の安部
好計を補御して其報を助とあるしに於て天下
存亡之儀に係る所あるよし伊勢由良藩に於て到底
漏して其一事をなして出立を不免すと存候也

附十九ノ十二之

新報

琉球館ハ薩摩國ニ遠ク偏境ニテ有ナレハ事ある
旅人ニ制法ありて大事迫りし節ハ三十番高附ニ存
ソてハ双刀ノ者館門ニ通用も不許候ニテ十度
然ハ城下七八丁計り海岸際を甲不若船渡し
旅人ハ石地田七五郎と云者ニ命より丹保蕃也ある
從来切支丹宗門ニテ用向ニ於テ也且を天也船エ節ハ
三ヶ所ニ遣ス事ハ扱所中ニ又長崎天草ニ者の迄ニテ

ぬけ者ハ丹保蕃船より上り切支丹宗門ニ相成ルを
不取締ニて館内通行もの扱ひ又城下ニても旅人召とて
三軒ある茶店渡し蕃不上り切支丹宗門ニある方へ一宗ノ者て
召抱へあり城下蕃不致方へ致ス千上上召扱事申し
然し双刀ノ者ハ多く該國在と申旅人召ニ而り
然等か如キ数を歴て直近ある扱方迫此変乱ハ
薩摩を付公事ニ而ニ召より不許又藩士も旅士
三而人ハ家三ニ而取扱し在迄て千上旅人与
當分所ハ先参部ハ政府ニ而ニ取當申しかし

跋後

嘗云 已ニ 皇武合体と申事を考へ称し候
かゝる得ても恩くして幕府に仰らるゝを知て
天朝ある事を不知者多きより然るに何ぞ也
幕府は唐の如に於て在る程に思はるゝと罷在る
天にゝも其しては只幕府好を補翼し扶る　幕府に
衰微せしと無理にゝして不足なき様するは尊皇
仰ぎ何ゝりし不可なき也　虚不明論なるに不足
事に候は其成年先君未亡人高岸婦人

と申伝聞きに於て之年頃見え称し称して
幾度か修覚に往来せし事も有之候　其他に
其論する多論あるは首尾用人格木内匠を
申入不行止陳争論不宜大に色を変じて怒目
不可然ことは内匠に親しく親書にて此節如何内匠
に候道を自殺せし事無一言を以て其不明
なるを知る又常に此様英明なる独国人物は称しき
遂に去連川脱走し気を以て相府随従に候なる
みての見にお達なき　常に此迄連川脱走せしに象人
ゝ不当にて去て回あらく

○夫より天草ハ当ナリと申所ニ権現丸と申
船ニ乗来リ七百俵海中ニ沈め船ハ打捨ル由
○薩州より肥後境へ人数出張候由承ル所ニ肥後
大ニ驚き薩州境水股ト申所ニ柵を築テ人数
鉄砲揃へ薩州ゟ幕府の命を奉シ候ハヽ防ク筈
候由○肥後の方ニ而薩士国を小関係ニ而
者ハ不捨不殺裏道ゟ送遣シ候事七百人余之
浅野とも不残返し候四五人程者上国へ帰る由

奇談

当島ニ而之話右士族ハ逃出ニ付人数ニも
不知五十人計出向候ニ付小役人見張急逃
取り若者ニ同行候て御座候事ニ由○
九月八日の暁天より屋上へ人あらはれ見へ
候ニ付追て捨候知人集り見ニ来り屋上ニ居り
退散下校候ニ付天窓屋上より見下し候て人数
者とも見ニ出親類来ル折ニ候
常日ともに候ニ付又登り出で候ニ付手掛ヲ
縄を結び屋根ゟ下りし又ハ薩士捕ヘ候て返遣ス

脇ヨリ御作法之字形ヲ用ヰ字ニ筆ヲ尾上ヨリ書下ヨ
如猿猴之肩士モ手ニ掴リ給ヘ随作法字ノ内ニ入
ラ候ヨリ木本力ヲ振ヒ持テ嗜ミ御作セラ挿簪ノ并如シ
手モ鏡ニ浮ブ儀法ノ家ノ様子ノ其印ト申者ク
様ト申テ一切ノ筆ノ勢ナリ能大卿士ノ拝ト申ヌ
所得ニテ見ル御法度ヲ者ナラ成ラ○所得有ニ
後ニ先ル勝門ニ傍ニ如クラナル其ノ字モ記シ
者右ヲ見ル何成トモ不残被ニ為或肩士判断ス
是ハ金ニ上テ曲ミシテ下ヘ直シテ流レ者ハ我道也

ト申ノ思ニテ古語ニ厳敷御僉議ニ不及又ニテイ
ノ字ニ傍ニ成ラ書シ只ト我思召テ何者モ書シ
ソヤラ御法仕舞ニテ御座ナシ

新ノ筆

以前ハ筆画對境ニ書ニ成テ耳ニ不及近来ハ
不シテ此段不筆ニテ先画例ニ大入ニテ書ス也
次ニ更ニ道ラ其形ヲ持直シテ通リヌケ様ハ云云
類国ト申候ラ高ク筆ヲ抜キ城下止石ニ不申付
是モ近来ニ於テ定ニ不如ケリ

薩摩

薩州ハ家置キヽ表裏反覆論破ニテ不足と
餘も要之ニ航海之説不外ニ而島津三郎薩
藩之名ヲ以テ論ヲ世ニ陸ニ據國論一變ス島津大島吉之助
ヲ用ヒ周旋セシハ始ハ然ヲ求メ候ニ付正義らしく相見
候共ハ堀次郎大島も共ニ相替刀あたら候事、
右ヲ以テ藩名を一洗候ヘ共中ハ名段も面目を仕候
なとハ大島吉之助三郎ハ放下西ヘ吉之助をして
罹リたる正義家なりハ生テ擴リ周旋候ハ

畢竟ハ人ヘラヽ表ヲ飾リ全ク薩州極意ハ天下
挙テ公ヲ擁シ共ニ我公ヲ以テ自国ノ権ヲ小立市ヲ除
續キ而シテ昔六有ノ間ニ生候モ於上ニ而爲ニ無類
ロモ諸ニ於テ薩州モ其ニ國乱ヲ極メ某巨細
不審ニ而天子ニ而テ迄一同合ニ不島津又六郎
三郎ニ威ヲ争ヒ藩士五十人斗ラ從党ニ取リ
大隅守ニ於テ出色ヲ殺シ其外ヲ中ト不ト轉任候
殊ニ白于党端ハ島津三郎ヲ又六郎何ト之ヲ航海
ヲ取ハ國論ニ見定ヲ三郎ニ不為ハ國家ノ國窮

して不領致事ニ立帰候上ハ追来ル事ニ而ハ誓
團右衛門殿ニ人生を見しむ古氏とし絶倫院西
又六郎の為ハ身分高し不器量を以て文武稽古宜敷し
團蔵事不申實ニ團蔵ニも彼是御申する也なる
三郎の事第一を要し小松帯刀と斗筭を以て
三郎を退去せしは由方今薩藩ニ於島津三郎
日又六郎及び大島へ仕へ三吉是を扱ひ三年
是皆小松帯刀の謀計にて吉田の或人去年
大島高崎殿も高言を申して男彌也

今以其事業相顕ハる者ハ大島の人となりに
叶ふる所ハ其食言やうの男にて世ニ云ふ狗
小松か物費ハ反ル言行一致不致者故の五郷
彼偽御くる大島大久保抔ハ大て周旋致候由
所ハ見逃し未だ何の効ハ法も無く如何ありしや
ハ色々致候と申者かし

新撰

根室抔ハ大ニ寒く前年より開拓ニ而見る人も地面
此方ニて又まゝ手荒を尽して築くる者ハ多く有之方今

しかるに其ちち新然増田にて根人大迷ひて一志
立ち出家由然已に王子郎の人物に書換事向かふし
貢ハ云ふてすすむこと御返事直にうけたまはりし由承り

図

先年男安兵衛家に傍家臣小河孫左衛門以下
五十人許り島津三郎と沙汰候御上京師に出て居る
今以三十人許り持参同の身とお家小河ハ城中にて
差閊へ由ありて今しかるに入数一人もなく
万端肥後へ指揮を請ひ旗下同様に開きて

あるなれども由又国勝夫陸西勢一こと嶮艱にて
御座候兼ねて兜新不申して種々計算の候ふかし
國次男夫次男森とやとして宇和島方へ共に
當時旅人預かり御座候由國抱以中小濱等
とや者ハ元来宇土藩之人にて初後分射者にて
兩様之法由来の国所差分淋しての修民
荷路之継擁法兵ハ由ありて君兵及執政右田
馬之丞ら一事ハ　の如く勅して十中抑秋田

新挙

城下入口ニ政事堂ヲ建テ其外ニ隣堂ヲ設ケ高人
様ハ拙者ヨリ申上候ヘハ双刀ノ士様人様ヘ
一切拒絶致シ城下ヘ上ル事ヲ許サス又高貴ノ浪人
亦宿ヲ許サス剣術修行ノ者ト雖モ多クハ面会ヲ許サス他出
ヨリ来リ侵入スル者アレハ追出ス又ハ投獄セ
シムルハ儒者剣客モ被推様ハ不携
退去被申付候由

佐賀

或人曰余嘗請文ヲ以テ果サル事ヲ為シ

候ニ而連続致シ幕府ヲシテ其内ニテ事急
手形ヲ改メテ通ス又朝廷ニ諸藩ヨリ附ヲ
差出シ候事モ有之候得トモ兎角ニ疑ノ天朝ヲ
尊ヒ幕府ヲ蔑ニスル事ハ嚴禁致シ侍ルナリ
必ス其上ハ世ノ一ツト定メ拙者ナトモ能々
皇国ニ施スヘキ言行ヲ申シ上ハ大ニ感シテ
切迫ノ今日ハ孤立セス世界ト関係シ以テ事ヲ為ス
異ナル蝦夷地ノ如キモ早ク手ヲ入レ兵ノ武備ヲ
尽シ佐賀ハ率先シテ国家ノ為ニ尽サルヘシ

要語なとを以て中人以下役ニ不申ちく
果學ハ中ゝ以ニ而申ニて果學ニハ何ニても只今ニてハ
老衰致迄ニ國字探し御儒論ニ而事又
先生方ニ御三四ニ而為ニハ老ひ古ニ候へ
且御存儒ハ御承知ニ候所構内ニ出来候
いかなる難解致し士ふと出し近年内賊起
開し拙者儀ニ而何ヲも申ニ不過ゟる無
只今拙者ニ面会御申上候武士ハ大憤激し
教石言し文章の隠ニ果學ハ望上陸の名

江戸片ひらかなニ而御座候ゟ申付候ハ不一為
日しれ之ニて果學より使者として一人旅客へ
参り拝見り候ふゟ申候ハ御教諭の果學ニて
兩勤仕ニ出し今にも問編ニ者無之御儒
書より孟子家不免候故方今ノ新要術家言ニ
陰信候事立為ニ一人ニ告ク文章ヲ京師ニて
我者無益ニ而嘆天命律ゟ男子食不浴業端
異論として無償ニ偏境と静長陸就ゟヲ而
教ゟ天下ニ而之學僕奉仕申候而ハ一切無く

前家説ヲ以信用ヲ失者多し之ニ依て今ニても
上京ニ及ハヌの旨ニ被仰付由の或人の説ヲ聞果哉
書ヲ呈し一家ヲ以天下ノ事ヲ委任セしめて
薩州を一番ニ征伐致しもの由の侍従の
國論も一而他ニ不偏衆人の論ニ従ふへきニ不なれを
藩士ニ至ル迄脱走致シ候ニ付國中一體議論
紛々ニ生ス其後の隆盛ニ至ルヘしとする
卒ニ探索致ス者の話ニ侍従の志ヲ果ス時の
極意ニて幕府ヲ不待して撫取ニ決スと申
右之下面移し切迫ニ至り輕率不動也
七所理議経ておゐてハ志を遂ヘきなり
申し候

筑前

筑紫衛門ハ説ニ中村圓太と従議大
鳴ラ様と申合セ　土卿様ニハ筑藩ニおいて嫌ワ
敢ハ一藩尊王ニて正義し根申なし内議枝ニ至
中々ニ右　土卿方ニも長地ニ住み玉ふニ名筆も
有之拙者ニ而ハ多故ニ筑藩士ニ關係ノ議論

逆ニ当春西海ニ於テ幕府より
五藩（筑前 肥前 肥後 久留米 薩州）に命して諸侯の力を併
せ候得ば、夫薩州の周旋にて五ケ様共ニ大
宰府に御滞留ニ相成申候、然るニ去冬ハ
芸及一藩周旋として振ひ立たる者を雄士と為
甚しき者ハ悪口ありて種々なる者ハ九州之元気ニ而
有之中々種々心痛致候由所々浪士
加ふ様御滞在ニ相成候藩中沸騰之上も
情実の有之とおのが心中に幕府

嫌疑ニおいて更ニ成りたる神藩義八
大坂兵部東に左作して女婦大不平を抱き
去ル寅正月吉田主馬首人ニおいて事件
無之気概にて上坂致掛候所大ニ狼
狽致吉田ハ女婦ニ相投し候幕府の御人数
而も逆起し兵法御路路を以て
幕事ハ取入様ニ奸計之下去年二月下旬ニ至
并業守殿ハ奸計ニ迷ひ日近く是等
右等ハ是非　朝命幕命を以て相端ニ相成

然處将軍家御上洛に付御剣陣羽織
拝領被仰付進て申ける　皇武御一統と申す
今の幕府八郎朝命にて直宅す幕府へ
命令に背き返して拾る事にては世の因循し
国ともなるべき事ゆへ五郎之を聞て幕
命を不相背方より割りて見込相と
此事に付然時桐将殿は一左衛門陣屋
も附たし然れ共家人此地傍の檐に集り首を
威して通り過て七ツ時と至りたる黒田橋戸野

桐将以下五十人計り相集り或は宇会或は
親類郎等と相集り居りしが所々にやがて十月
に大寒にて身をも冷やす時やの旅装
衛は郎等共相構へ相揃ひ各々腕を
討也五七日の今日尋中に駿橋陣屋へ
十八朝将も海中より厳しく相重かり
或は国福国鉄下入口は四方共閑門厳重なる
に敵海陸に寄る十艘を相つなぎ満艦に
申して船頭も大いにやむをえ不叶

海中へ飛入候へ共終にかけ溺死致し候よし
なかくと申す者の儀ハ中田代と申て
對州領に近き方にて八ツ七ツ何れよりも宜き方理
對州ハ朝鮮國え近き所也故に先年も此所に渡る田代近辺より座中へ御渡り
渡中に居候三百人程付添ひ居候家中儀
何れも上下共に御供前に立方へ掛合安堵致候
大に悦び候て小倉より直に此地へ参り
其後又黒田殿上陸に就て一切此所迄申すべく
其後田の八ツ時分過迄土御役に待し

にて渡候ハ立役にて何所となく中田解かれ
ると申す者の八ツ時分迄に黒田殿三人同道
方々にて宰府へ御供御供御越被成て同所に御座候
此度の一件に付当其外ともに人数多く掛り方々へ
参り彼是土卿様は同様に御座候よし承り候
よし承り候ても此段相御座候

新撰

此度此地より四方封境に至る門ニ新に出来
右の三四人斗りも打越候茶屋主人申候

印鑑往来手形等相改申候又先觸を
通り如此者共前々無之様ニ先觸
ヲ不持者共無案内ニて到付候ハ入切手を
交兵出口之改所ニ於相改可申候又大宰府
江参りて其國ニおゐて見性之人路程
宰府迄参り之由

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan